

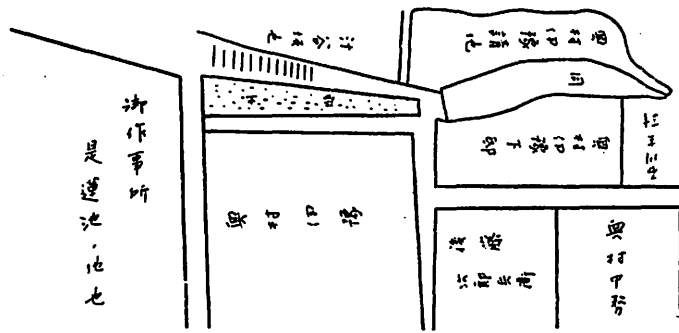
松雲公年譜に記載す。正徳三年八月廿五日備後守利章君金澤到着登城御對顔、翌廿六日大聖寺歸邑。九月四日利章君金澤出府登城御對顔。同四年正月廿八日利章君金澤來駕。六月廿四日利章君金澤出府登城御對顔。七月九日利章君金澤到着、十一日江戸参府、御送御使番富田主税被遣之。同五年九月十九日利章君大聖寺より金澤御來調、翌日御歸館。享保元年二月十五日利章君來駕。七月六日利章君御來調、翌七日江戸御参勤。二年十二月朔日利章君金澤御來調、御盃之上御刀雲次作り代金七枚三兩被進之。同三年四月六日利章君御來駕、御饗應能御付、十五日豊姫君より御饗應、能興行被御付、廿四日大聖寺御歸館とあり。三州志來因概覽附録に云ふ。寶曆七年正月八日夜越後屋敷出火焼失。古老の談話に云ふ。右火災後備後屋敷に残りある長屋を越後屋敷焼跡へ移し、指かゝり入用の役所は此の内に建てたる處、同九年の大火に再び焼失すと云ふ。備後屋敷は今前田余所次郎居宅の向ひ學校中と云ふ。此の屋敷は松雲公の二男富五郎殿後備後守利章君の居第也。

○奥村氏亭地跡

隱國公年譜に云ふ。享保十二年九月六日世子勝丸君卯辰山の山王社へ初めて御参宮、御歸館の節直に執政奥村伊豫守有輝の離亭へ被爲入、饗膳上之、御刀一腰献上之、吉徳宗辰兩卿より装刀等賜之。註に云ふ。右離亭は、是より先汁谷坂の上に屋敷を賜ひ新築す。後元文三年右屋敷木石共上之、今は公有地と成るとあり。天野憲章曰く、右亭地は尻谷坂の高にて、今公園の地内なるよしい傳ふと、古老の傳説を聞くといへり。平次按するに、延寶の金澤圖には前に載せたる如く見ゆ。右古圖にて見れば、延寶の頃奥村伊豫今の公園内に居住し、汁谷坂の上に下邸及び請地もありしと見ゆ。

○大地新八郎番邸

此の邸地は、小尻谷の高にて、小將町の方也。燕窩風雅に云ふ。大地昌言字士倫。一字行甫、通名新八郎、號東川。號遼軒。號慈齋。號奚癡。蓋室先生之外甥也云々。有門人印牧直道・加藤惟實所輯奚癡遺稿二卷と。平次按するに昌言の祖父は大地甫齋と云ひ、父は彦右衛門近知、母は室鳩巢の妹なり。鳩巢文集に載せたる大地近知墓誌に云ふ。吾妹



夫大地君既歿之明年、甥昌言千里走書致辭曰、嗚呼先大人有幽德素行之懿、而不肖孤不能述焉、與先妣合葬于州南野田山之壙、先生如賜一言以銘其墓、所謂生死而肉骨者也云々。大地之先出自常州佐竹氏、或曰、佐竹別族有、大内氏、以我邦方言與大地同音、故轉爲今號云、君諱近知、彦右衛門其俗稱也、會祖名道昌、裔爲佐竹家臣、慶長五年佐竹氏遷于羽州秋田邑、道昌留居常州上會村、祖彦兵衛名知治、二世皆里居不仕、父名眞純、號甫齋、母奈須氏、京師處士宗泉女也、初甫齋君自常州詣江府、始仕於稻葉美濃侯、既而辭侯家、來仕賀藩、方松雲公時、朝夕奉近職數十年、至貞享元年卒于藩邸、公召君賜食、觀父後云々、君以萬治三年六月二十四日生于江戸、享保十年六月十七日疾卒於家、享年六十六、室氏諱信、父玄機、母平野氏、寛文八年二月三日生于江戸、正徳元年三月三日先君卒、生一男一女、男昌言見仕本藩、好學有志行、亦不辱所生云々。さて新八郎昌言は、參議綱紀卿の書物書寫役に召し出され、十五人扶持を賜はり、享保十年父彦右衛門近知が遺跡を繼ぎ、遺知百石賜はり、同十三年二月書物奉行を命ぜられ、寛延